

Coffee break



H30. 6. 25 (月)

桶売小学校長 本名 武



心に響く・・・「叱る」



以前お世話になった当時の校長先生から、年に数回、教育に関するずしりと重い資料が届きます。毎回勉強になることばかりでありがたいです。その中から、「心に響く」ときとは、いただいた資料の中に伝わりやすい、また、いろいろと考えさせられる話がありましたので紹介します。

～「叱る」～

5校時が終わって職員室に帰ってきたF先生。洗い顔をし、足の運びも苛立たしい。5校時、教室で何かあったな、と思うまもなく、中学3年の女子生徒Tが赤い顔をしてF先生の机に歩み寄りました。そのとたん。

F先生「なんであんなことを言ったのか！」

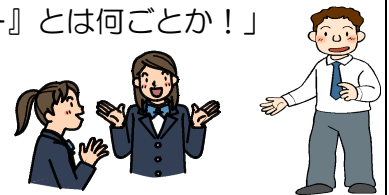
生徒T「はい、すみません。」

F先生「不真面目なおしゃべりを注意したのに、『いいじゃーないのー』とは何ごとか！」

生徒T「すみません、先生の熱心さはよくわかっているつもりです。」

F先生「それならなんで茶化すのか！」

F先生の追及はきびしい。



そこへ担任I先生が現れバトンタッチ。説教が始まるかと思ったら、そうではなかったのです。

I先生「Tさん、ごめんなさい。僕は君に謝らなければならない。」

と言って、I先生が生徒Tに頭を下げたのです。

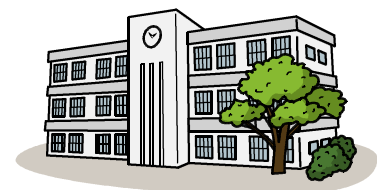
I先生「君は昨日も教室で同じようなことを言いましたね。僕はそのとき、黙殺しました。それがいけなかった。君のためにも注意すべきだった。君が今日また同じ間違いを繰り返したのは、僕が悪かったんです。ごめんなさい。」

とたんに、女子生徒の眼から涙が溢れました。

私は自席からその光景を眺めて、心が洗われる思いでした。

I先生「分かったら帰りなさい。」

I先生の言葉はそれだけでした。



職員室を出て行く女子生徒の後ろ姿を見ながら、私はその親に代わって「I先生、ありがとう」と感謝の言葉を口にしたい自分をおさえるのがやっとでした。

女子生徒Tさんの心に、I先生の真摯な態度、言葉・思いが響き伝わり、調子に乗った軽口への内省を促したのだと思います。いつの世も、心に響く対応に、子どもの心も動くのだと思います。

一方、酷なようですが、I先生の反省のとおり、やはり指導すべき時にそれを行わず通り過ぎてしまったのは反省点です。上の話は、美談となりましたが、もし、生徒Tの人を小馬鹿にしたような軽口に、他の先生がかつとなり、激しい叱責から生徒が不登校等になってしまったら、あるいは体罰につながってしまったら・・・。そのようなことも考えさせてくれる～「叱る」～でした。